平成２３年６月２日

各　位

株式会社ACKグループ
代表取締役社長：廣谷　彰彦
（ＪＡＳＤＡＱ・コード番号２４９８）

News Release

－国際開発ジャーナル「開発コンサルタント・ニュース」記事掲載－
～ＧＣ事業本部　軌道交通部　泉千年氏～

（株）国際開発ジャーナル社の発行する月刊誌「国際開発ジャーナル（２０１１年５月号）」の開発コンサルタント・ニュースに、弊社ＧＣ事業本部　軌道交通部　泉千年の記事が掲載されました。

インドの首都、デリーを舞台に交通渋滞と大気汚染対策の“切り札”として実施された「デリー高速輸送システム建設計画」。デリーメトロ事業はインドの公共工事のあり様を根本的に変えたと言われています。その背景には日本式の施工管理体制に大きな理解を示し、コンサルタントに強い権限を与え続けたデリー地下鉄会社のスリーダラム総裁の強力なリーダーシップも理由に挙げられます。

今や１日約 150 万人の人々が利用しているデリーメトロ。居住者にとってはなくてはならない行動手段となりました。

詳細については次ページをご覧下さい。

なお、記事掲載につきましては（株）国際開発ジャーナル社の承諾を受けており、無断で転載・複写することはご容赦願います。

お問い合せ先
株式会社ＡＣＫグループ
TEL: 03-6311-6641　FAX: 03-6311-6642
E-mail: ir-ackg@ack-g.com　URL: http://www.ack-g.com
統括管理本部　担当　本田

出典：国際開発ジャーナル　2011年5月号（記事使用承認済）

2 貴重な巨大複合プロジェクトのPM経験

（株）オリエンタルコンサルタンツGC事業本部　泉 千年氏

デリーからハノイへ

インドの首都、デリーを舞台に交通渋滞と大気汚染対策の“切り札”として実施された「デリー高速輸送システム建設計画」。その概要については本誌先月号の特集で紹介したが（32～33ページ）、第Ⅰ期の終盤から第Ⅱ期完了までPM（プロジェクト・マネージャー）を務めたのが（株）オリエンタルコンサルタンツGC事業本部軌道交通部プロジェクト部長の泉 千年（ちとし）氏（47歳）だ。

1998年10月から着工したⅠ期では、デリー中心部の65km、また2006年から開始されたⅡ期ではⅠ期区間の延伸工事や新線の建設工事が行われ、特にⅡ期工事に関しては日本でも例がないと言われる急速施工の実施により、120kmに及ぶ地下鉄網をわずか4年半で整備した。「Ⅰ期工事の間に確立された徹底的な“工程・安全・品質管理”は、Ⅱ期にもそのまま引き継がれ、さらに改善すべき点があれば日々弛まず、その改善に努めていった。こうした取り組みが迅速な工事の進捗につながっていったと思う」とふり返る泉氏。

1日150万人が利用するデリーメトロ

デリーメトロ事業は、インドの公共工事のあり様を根本的に変えたと言われているが、その背景には日本式の施工管理体制に大きな理解を示し、コンサルタントに強い権限を与え続けたデリー地下鉄公社（DMRC）のスリーダラム総裁の強力なリーダーシップもあったといえよう。

この4月、泉氏の新しい活動の舞台はインドからベトナムに移った。プロジェクトは、やはり巨大プロジェクトの一つとして注目を集める「ハノイ市都市鉄道建設事業（ナムタンロン～チャンフンダオ間2号線）」。タイド借款協力であるSTEP（本邦技術活用条件）の対象事業で、第Ⅰ期のL/A（借款契約）は09年3月31日に締結されている。借款額は146億8,800万円。金利0.2%、償還期間40年（うち据置10年）、調達条件はコンサルタント、本体部分とも日本企業タイドだ。

承知のとおり、首都ハノイ市は経済発展に伴う市内交通量の急激な増大により渋滞や交通事故の多発、大気汚染などの深刻な問題に直面しており、都市鉄道の導入や環状線の整備などによる都市交通システムの抜本的な改善が求められている。今回のSTEPプロジェクトは、ハノイ市中心部を走る都市鉄道を建設し、交通の円滑化や環境面の改善を図っていくものだ。

泉氏によると、建設対象11.5kmのうち8kmが地下を走り、整備予定の10駅中7駅がやはり地下に建設される計画という。路線はハノイ旧市街の街中を通ることに加え、紅河の堆積エリアという非常に軟弱な地盤が工区となることから、すでに難工事が予想される。泉氏は「地下工事のエキスパートとしてキャリアを積み上げてきた者にとっては、非常にチャレンジフルな案件。やりがいを感じているし、思う存分、力を発揮してきたい」と話す。受注する2年ほど前から技術営業という形で、デリーの経験やノウハウなどをベトナム側の関係先にプレゼンしてきたという泉氏。そうした地道な努力が報われた形だが、日本の技術力に寄せるベトナム側の信頼と期待感に触れるにつれ、技術者としての情熱も再び燃え上がっているようだ。

泉 千年氏

STEPを供与する本来的な意味合いも、こうした点にこそあるのだろう。

技術者としての醍醐味

泉氏は京都大学工学部、同大学院を修了した88年に熊谷組に入社。当初8年ほどは主に国内業務に従事し、東京湾横断道路やダムなどの工事現場で「土木施工のイロハを学んだ」。初めての海外プロジェクトは熊谷組がシンガポール政府から受注した「シンガポール地下鉄建設事業」。「国内での施工管理や細々とした設計業務のバックボーンがある程度あったので、やり易かったし、やり甲斐も感じた」と泉氏。その後、01年にパシフィックコンサルタンツイ

ンターナショナル（旧PCI）に移り、同社のハノイ事務所に３年半駐在。円借款が供与された国道18号線案件などに従事し、ベトナムに対する“土地勘”を養っていったようだ。オリエンタルコンサルタンツへの移籍は08年のことだ。

これまでに従事、経験したODAプロジェクトはベトナムの国道18号線、インドのデリーメトロ、そして今回PMとして張り付くハノイ市都市鉄道建設事業の３案件。いずれも長期にわたる円借款案件で、今回も６～７年は「家族を帯同し現地に張り付く覚悟」だ。

日本式の施工管理が徹底された工事の一コマ

デリーメトロが泉氏に残した“財産”は、何といっても巨大な複合プロジェクトのマネージメント経験である。土木工事に加え、電気、車両、信号・通信など非常に多様なポーションが絡まり、かつ車両はドイツや韓国、信号・通信はフランス、エスカレーターはフィンランドといった具合に、完全な“多国籍チーム”をPMとして一つに束ねていった経験は、開発コンサルタントとして大いに鍛えられたようだ。その経験と財産を今度はハノイに伝えていかなければならない。

今や１日150万人の人々が利用していると言われるデリーメトロ。「仕事の成果が目に見えて表われてくるのが私たちの仕事の醍醐味。デリーの経験を生かしながら、ハノイでも頑張っていきたい」と泉氏は力強く結んだ。